「面接」

伊藤貴晴　作

【登場人物】

女１ 店長

女２ 高校生

【１】

女１・女２がいる。

女１ アルバイト希望ね

女２ はい

女１ 高校１年生

女２ はい

女１ 保護者と学校の許可はもらってる？

女２ はい

女１ どうしてウチを選んだの？

女２ 深い理由はありません。放課後と休日にバイトできるところを探してて

女１ ウチの店に来たことある？

女２ はい。パンケーキ食べました

女１ そう。普通だった？

女２ おいしかったです

女１ そうじゃなくて、接客

女２ はい

女１ そっか

女２ どういうことですか？

女１ ウチっていわゆるコンカフェだから

女２ コンカフェ？

女１ コンセプトカフェ

女２ コンセプトカフェ

女１ メイド喫茶は分かる？

女２ はい

女１ メイド喫茶はメイドが出迎えてくれるっていうコンセプトのカフェ

女２ あー

女１ コスプレ系だと例えば、メイドとか執事とか和服とか、他にも猫カフェとか動物がいるところもあるし、ボードゲームとかカードゲームができるところとか。でもウチは一見普通のカフェだし、普通のお客さんには普通の対応するし

女２ そうなんですね

女１ ウチはお酒も出さないし、いかがわしいお店じゃないから安心して

女２ 分かりました

女１ とは言っても、誰でもいいわけじゃないの。お客さんのニーズに応えられる人じゃないと

女２ 私じゃダメですか？

女１ まだ分からない。それを見極めるための面接だから

女２ そうですね

女１ じゃあ、あなたの適性を調べます

女２ 適性？

女１ さっきも言ったけど、ウチは一見普通のカフェなの。コンセプトは従業員の適性を見て決める

女２ 従業員ごとにコンセプトが違うってことですか？

女１ そういうこと

女２ あの、バイト希望しておいて何なんですけど、私、あんまり接客って得意じゃないんですけど

女１ 大丈夫。どんな人にもその人の良さがあって、その良さを気に入る人もきっといるから

女２ そうなんですか

女１ 蓼食う虫も好き好きって言うでしょ

女２ それ、褒めるときに使う言葉じゃないですよね

女１ あばたもえくぼ

女２ それも誉め言葉ではないですよね

女１ 人を見たら泥棒と思え

女２ それは完全にダメですよね

女１ そういうコンセプトもあるってこと

女２ そうなんですか

女１ いくつか質問するね

女２ はい

女１ 人と話すのが好き

女２ はい

女１ 人と話すと笑顔になる

女２ いいえ

女１ 困っている人がいたら助けてあげたい

女２ はい

女１ 人の良いところよりも悪いところを見つけるのが得意だ

女２ いいえ

女１ 他人の不幸は蜜の味だ

女２ いいえ

女１ 欲しい物は他人から奪ってでも手に入れたい

女２ いいえ

女１ 愛するより愛されたい

女２ 分かりません

女１ お酒を飲みすぎて失敗することがある

女２ お酒は飲みません

女１ ハンドルを握ると性格が変わる

女２ 免許持ってません

女１ 選挙に行ってもどうせ世の中は変わらないと思っている

女２ あの

女１ 何？

女２ 私まだ高校１年生です。選挙権もありません

女１ そうね。自分の話をするより人の話を聞くことの方が多い

女２ はい

女１ くよくよ悩むことがある

女２ はい

女１ とても憂鬱だ

女２ いいえ

女１ 自分なんか、いてもいなくても同じだと思う

女２ いいえ

女１ 急にいなくなってしまいたいと思うことがある

女２ いいえ

女１ 鬱病だと診断された

女２ いいえ

女１ 不治の病だと診断されたい

女２ いいえ

女１ 中二病に憧れている

女２ いいえ

女１ 本気と書いてマジと読む

女２ いいえ

女１ 夢と書いてドリームと読む

女２ いいえ

女１ 憂鬱という字が書ける

女２ いいえ

女１ ストレス発散で人を殴ることがある

女２ いいえ

女１ 世の中、お金があれば何でもできると思っている

女２ いいえ

女１ 人に言えない趣味がある

女２ いいえ

女１ 普通ね

女２ 普通ですか

女１ 普通の人はちょっとね

女２ 普通じゃダメなんですか？

女１ ウチ、コンカフェだから

女２ コンカフェの定義が分かりません

女１ 練習しましょう。私と同じように言ってみて

女２ はい

女１ いらっしゃいませ、こんにちは

女２ いらっしゃいませ、こんにちは

女１ お帰りなさいませ、ご主人様

女２ お帰りなさいませ、ご主人様

女１ おととい来やがれ、馬鹿野郎

女２ おととい来やがれ、馬鹿野郎。こんなこと言うんですか？

女１ こういうの好きな人がいるの

女２ へえ

女１ 私の酒が飲めないって言うの？

女２ お酒は提供しないんですよね

女１ 私のお茶を飲もうなんて百万年早いわよ

女２ 私のお茶を飲もうなんて百万年早いわよ

女１ ツンデレキャラでいきましょう

女２ マジですか

女１ あなた、ツンデレの適性があると思う

女２ 知りたくなかった事実ですね

女１ デレることは考えなくていいよ。ツンツンしてればいいから

女２ そうなんですか

女１ じゃあ私がお客さんをやるから、接客してみて

女２ 分かりました

女１ スタート

女２ 何しに来た

女１ え

女２ 早く座りなさい

女１ はい

女２ 背筋を伸ばして

女１ はい

女２ 注文は？

女１ え？

女２ メニューを見なさい

女１ はい

女２ よく考えて選びなさい

女１ パンケーキください

女２ 本当にパンケーキでいいの？

女１ はい

女２ トッピングは？

女１ いちご

女２ 本当にいちごでいいの？

女１ はい

女２ 用意するから待ってなさい

女１ カット。いいよ

女２ 怒られませんか？

女１ 大丈夫だよ。こういうのが好きな人がたくさんいるから

女２ たくさんいるんですか

女１ なじられたいんだよ、みんな

女２ なじられたいんですか

女１ だからなじって

女２ なじるんですか

女１ スタート

女２ おい、豚

女１ 私ですか？

女２ お前以外に誰がいるんだ。薄汚い豚

女１ はい

女２ 注文してみろ

女１ え、あの

女２ メニューを見ろ。字も読めないのか

女１ 読めます

女２ 読んだらヒキガエルみたいな汚い声で懇願しろ。何が食べたいのか言ってみろ

女１ パンケーキください

女２ どうかパンケーキを恵んでください、だろ

女１ どうかパンケーキを恵んでください

女２ パンケーキが焼けるまで直立不動で待ってろ

女１ はい

女２ 匂いをかいでもよだれを垂らすなよ。薄汚い豚め

女１ カット。いいよ

女２ 怒られません？

女１ 怒られないよ。そういうのが好きな人だから

女２ 誰なんですか

女１ たくさんいるよ

女２ あとこれ、ツンデレじゃないですよね

女１ そうだね。鬼軍曹だね

女２ いいんですか？

女１ よし、じゃあ具体的な設定を決めよう。あなたは下町の定食屋の娘で、父親は借金作って蒸発して、母親が一人で経営するお店を手伝ってるの。服装は制服にエプロンと三角巾。お客さんは常連ばっかりで、子供の頃から知ってる人達。いい？

女２ 急に具体的ですね

女１ いくよ。スタート。こんにちは

女２ おばちゃん、また来たの？

女１ また来ちゃ悪い？　邪魔するよ

女２ 邪魔するなら帰って

女１ ご飯食べさせてよ

女２ 家で食べなよ

女１ 売り上げに貢献してあげてんじゃないの

女２ おじさんはいいの？

女１ うちのは飲みに行ってるからいいの

女２ 何にする？

女１ パンケーキ

女２ おばあちゃんは？　まだ入院してるの？

女１ うん。もうすぐ退院できると思うけど。ずっと車椅子かな

女２ そうなの？

女１ もう年だからさ。仕方ないよね

女２ うちのご飯食べたら元気になるから連れて来てよ

女１ だったらこの店もバリアフリーにしてもらわなきゃね

女２ バリアフリーなんてハイカラな言葉、よく知ってるね

女１ バカにするんじゃないよ。私だってまだ若いんだから。あんたのお母さんだってまだ若いんだから、早く再婚したらいいのにね

女２ お父さんを待ってるんです

女１ お父さん？

女２ お店を続けてれば、いつかお父さんが帰ってくるって思ってるんです

女１ 泣かせるねえ。じゃあいっぱい稼がないとね

女２ だからたくさん注文してね

女１ 任せて。うちのにも来るように言っとくよ

女２ たまには家で食べさせてあげてね

女１ たまにはね。カット。いいよ

女２ 良かったですか

女１ すごく良かった

女２ 自分でもうまくできた気がします

女１ じゃあこの設定でいきましょう

女２ あの、これ、実際にどうやって接客したらいいんですか？　相手が設定を知らないと成立しないと思うんですけど

女１ ホームページにプロフィールを掲載しておいて、気に入った人を指名して予約するの。だから、予約があった人にだけコンセプトで対応するんだよ

女２ なるほど

女１ 予約なしのお客さんは要望がなければ普通に対応すればいいから

女２ 分かりました。あともう一ついいですか？

女１ どうぞ

女２ 今の設定で、注文がパンケーキっておかしくないですか？

女１ そうだね

女２ 下町の定食屋だったら、豚の生姜焼き定食とか、アジフライ定食とかじゃないですか

女１ そんなメニューないよ。下町のパンケーキ屋ってことにしよう

女２ 分かりました

女１ じゃああなたを採用します。明日からよろしくお願いします

女２ 辞退します

女１ え？

女２ え？

女１ 今、何て言った？

女２ 辞退します

女１ 辞退？

女２ はい

女１ 働かないってこと？

女２ はい

女１ どうして？

女２ ちょっと思ってたのと違うので

女１ そりゃ何でもかんでも思い通りにはいかないよ

女２ いや、そういうことじゃなくて

女１ じゃあどういうことなの？

女２ いや、普通のバイトがしたいので

女１ 普通だよ

女２ 普通じゃないです

女１ どこが普通じゃないの

女２ 私、演技力が必要な仕事がしたいわけじゃないです

女１ あなたには演技の才能がある

女２ だから演技はしたくないんです

女１ あなたならうちのナンバーワンになれるよ

女２ ナンバーワンに興味はありません

女１ あなたならうちのオンリーワンになれるよ

女２ そういうことじゃないです

女１ 絶対向いてるから。やめるなんてもったいないよ

女２ 嫌です

女１ どうしてもダメ？

女２ ダメです

女１ ナンバーワンになったら時給が上がるよ

女２ やります

女１ よし

女２ どうしたらナンバーワンになれますか

女１ 敵を知り己を知れば百戦危うからず。まずはコンカフェに来るお客さんの気持ちを知ることが大切じゃないかな

女２ なるほど

女１ だから街中のコンカフェに行っておいで。支払いは経費で出してあげるから。おすすめのところ、いくつか案内してあげる

女２ ありがとうございます

女１ 頑張ろうね

女２ はい。頑張ります

終わり。